

「風土会 会報」 平成20年夏号

文責 柴田 悦子

1 なぜ、「風土会」なのか

「教育の実践に関する改善は、教師や学校から始まるのであって、政策から改善されたことはない」とは、アメリカの教育学者のことばです。

「教育は人なり」

まずは教師に元気がないと、よい教育実践は生まれません。だからこそ教師や学校を「エンパワーすること」が求められるのです。「エンパワーする」とは、「元気にする、やる気にする」という意味です。

「風土会」は開かれた学習会です。「学びたい」と思う教師が、いつでも気軽に参加できる会です。ねらいは、参加された先生方が元気になり、とにかく失敗してもやってみよう！と思うこと。つまりは、即、「実践」につなげることです。そんなモチベーションを高める会を目指しています。

2 「風土会」が目指す「風土づくり」とは何か

2-①子ども達をとりまく現状

核家族化、少子化などの現代社会の中では、人と接する機会が昔にくらべると非常に少なくなっています。身内、準身内、世間が狭くなり、「赤の他人」化が進んでいます。そんな環境の中で、子ども達は人とうまく関わることができず、コミュニケーション能力が低下しています。また、自分の本心をうまく表現することができなかつたり、相手の気持ちを読み取れないことにより、様々な対人関係のトラブルが生じています。「人と関わり合う力」「他を思いやる心」が育っていないといえます。

そんな中、学校現場でも、集団が教育的機能を失っていることによる諸問題が生まれています。不登校やいじめ、学級崩壊等の学校不適應は、学校現場で深刻な問題となっています。

2-② 「集団づくり」の意義

生徒にとって教育機能がある集団で生活することは、他者への感謝の気持ちと責任を育みます。生徒にとって友達の輪は、学校を楽しくし、嫌なことへの耐性を生みます。心の内を語り合うことで、心理的安定感が高まります。そして、自分というものが定まり、それができることで自分と他者の相違に関する洞察が進みます。その結果、相手のことを尊重し、思いやる気持ちが生まれます。

好ましい集団における教育力は、現代の抱える諸問題を打破する突破口となり得るものです。だからこそ、学校における「集団づくり」が重要になってきます。

2-③「集団づくり」の根底にこだわる「風土づくり」という考え方

「集団づくり」というと、学校行事や授業を通して行うものと考えている人が多いのですが、それはある意味、対処療法的といえます。「その時」だけ一瞬、集団としての高まりがみられますが、持続性はありません。だからこそ、その集団を支える「風土づくり」という根底にこだわる必要があると考えます。「風土づくり」はトピックス的な取り組みでは作れません。また、すぐに効果が現われ、集団が劇的に変化することはありません。地道な取り組みを行う中で、少しずつ少しずつ培われるものです。実際は、「風土づくり」という地道な取り組みをしながらも、学級・学年集団づくりや行事、授業づくりを同時に行うこととなります。

学校風土や学級風土を創り上げるためには、まず、学校や学級の「実態」にあった「ビジョン」をもつ必要があります。「ビジョン」をもったうえで、様々な実践活動を行いますが、「実践」には「理論」の裏付けがなくてはなりません。教師が実践の裏に隠れた大きな理論を自覚していることが大切です。

次に、そのことを生徒や保護者に伝えることが必要です。理論を伝えることは、教師のねらいに気づかせることなので、実践のねらいが、さらに深く根付いていくこととなります。つまり、きちんと理論を伝えることは、「風土づくり」において大きな効果を生むのです。

また、実践を行った後には、「振り返り」をすることが大切です。振り返りをする中で「気づき」こそが「理論」となっていくからです。例えば、振り返りの中で自分の立場と反対の意見を聞くことは、自分の考えを「広げる」ことになり、同じ立場の意見を聞くことは、自分の考えを「深める」こととなります。縦軸と横軸に広がり深まるものが理論です。

「学校風土」「学級風土」を築き、浸透させるためには、一本筋が通っていないとうまくいきません。そのために必要なのが、「理論」「ビジョン」「実践」です。だからこそ風土づくりにおいては「理論」「ビジョン」「実践」3本柱で行うことが何よりも大切です。

3「実践」のための「ビジョン」のたて方

1年間の見通しをたてるためには、まず、1学期のビジョンをしっかりとち、力を入れて実践することが、必ず後につながっていきます。1学期は「出会い」「ふれあい」「自己開示」をキーワードに、個や集団の支持的風土の人間関係づくりを目指します。2学期からは行事にからめて実践することもできます。また、同じことを繰り返し行ったとしても、自然と中身は広がり深まっていきます。そういったことから、1学期の実践は大切です。

「安心感のない教室」は「本音」を言うことができず、「お互いが注意し合う関係」はまずできません。それは、授業規律とも関連していきます。例えば、授業中に私語があっても、生徒同士で改めようとする雰囲気無く、常に教師が一人で悪戦苦闘することになります。生徒同士の横のつながりがあれば、教師が注意する前に自分達で声をかけあい、改めようとする前向きな雰囲気ができます。「教師対生徒」という縦の関係だけではなく、

「生徒同士」の横の関係をつくることは、中学生の時期には特に、大きな効果を生み出すこととなります。だからこそ、まずは1学期に「学級風土」をつくっておきたいのです。1学期中に、「つながりに気づき、つながりに向き合い、つながりを求める」サイクルをつくっておくことが「風土づくり」において、大きなカギになるといえます。

4 自己を確立するために必要な「自己盲点」という考え方

中学時代は、自己を確立する大切な時期です。人間関係は、自己の確立を支援します。生徒は、自分で悟って自己概念をつくっているのではなく、友達から「君ってこうだね」というフィードバックをもらって自己を確立していきます。中学生という時期は、他者からどう見られているのかが、非常に気になる年頃です。そんな時期に、プラスの評価をもらうことは、大きな効果を生みます。そこで「自己盲点」という概念を学級に定着させます。

例えば、友達から「意外に気が利くんだね」と誉められたとします。この「意外に」という誉め言葉は、新しい自分のよさをまわりが認め、自分も気づくことになるので、大きな喜びを実感できます。自尊感情を高めることでもあります。

つまり、「自尊感情+自己盲点=自己理解」という図式となります。自分の可能性は、気づきの中から生まれます。だから、人との交流を大切にするという考え方を、生徒に定着させます。

「意外に～」というプラスの自己にたくさん気づき、うれしいシャワーをあびさせることで、自信が芽生え、気持ちが安定します。自分には、未知の力がたくさんあることを実感させることとなります。そんな場を意識的に設定することが、「風土づくり」において、大きな効果を生むのです。

5 目標とする学級集団

人間関係を築くときには、ぶつかる、ケンカするのはあたりまえという考え方をもち、生徒にも理解させ、ぶつかった時にどうするかを学ばせます。関係性の中で生きる個性が大事なのです。

目標とする学級集団は、互いに気持ちよく生活できるためのマナー（ルール）が定着していて、ふれあい交流ができ、積極的に協力原理が働く集団です。学級集団と生活集団の両側面を形成する必要があります。

集団には様々な教育力があります。例えば、友達の考え方や行動を参考にしたモデリング学習。友達の目を通した自分についてのフィードバック。自分と友達との行動、感情、考え方の違いの比較からの新しい気づきなどです。教師が集団の教育力を意識することで、生徒に自覚させる場面をつくりだすことができます。そのためにも、良いクラスはこんなクラス、悪いクラスはこんなクラス、集団の教育力とはこんなもの、ということをはっきり生徒に伝えた方がよいといえます。何となくこうなってほしいなあと教師が思っているのでは不十分です。学級集団の現在地はこうで、目的地はこうだということをはっきりさせ

ることで、生徒にもその意識が生まれます。生徒にも「目的地」を目指させることが大切なのです。

マナーの共有については、「生徒が暗黙のうちに心にもつこと」が望ましいのですが、簡単にできるものではありません。「こんな風に気づいてほしい」という思いを教師が語ることも必要です。また、マナー（ルール）が共有されていることの心地よさを生徒が実感し、納得することも「ルールの暗黙化」につながります。

生徒同士も生徒と教師の関係にも、「響き合う関係」が築けるようになると、学級の中に安心感のある落ち着いた雰囲気生まれてきます。ビジョンをもって、繰り返し積み上げていくことで、目標とする学級に近づくのです。

6 エンカウンターとソーシャルスキルの融合

エンカウンターは交流活動を目的としているので、楽しみながら身につけることができます。ソーシャルスキルトレーニングはスキル獲得を目的とした「しつけ」の要素が強いものです。即効性は、エンカウンターよりソーシャルスキルトレーニングの方があります。しかし、教師も生徒も、ソーシャルスキルトレーニングだけを行っているとう、満足度が下がっていきます。ソーシャルスキルトレーニングを学ぶ風土として、エンカウンターで培われた良好な人間関係が必要なのです。エンカウンターを上手に取り入れることで、生徒の内発的なものが生まれます。ソーシャルスキルトレーニングを少し柔らかくし、楽しみながら身につけるために、エンカウンターを生かして組み立てるという方法。つまり、エンカウンターとソーシャルスキルの融合を提案します。

ソーシャルスキルトレーニングの流れは、下記のようになります。

- ①インストラクション
- ②モデリング
- ③リハーサル（ロールプレイ）
- ④フィードバック（リーダーからの評価）
- ⑤般化

リハーサルについては、できるまで繰り返します。フィードバックでは、はげまして修正させ、ほめて強化します。実際の場面でうまくできていれば般化され、ダメならまたやり直しということになります。

エンカウンターの流れは下記の通りです。

- ①インストラクション
- ②エクササイズ
- ③シェアリング（仲間同士の評価）

育てたい力を、効率よく向上させることが目的です。その成果となる姿が、実際の様々な場面で役立っていることに、教師は注意をはらうだけでよいので、教師側にストレスがありません。

流れを見てわかるように、二つに共通している所は①のインストラクションのみです。基本的には異質なものであるため、教師がそのことを深く理解し、融合させることでのメリッ

トを考えた実践をすることが求められます。即効性を求めるのではなく、その後のビジョンをもった実践につなげることが大切です。

例えば、「お礼を言う」というスキルにエンカウンター的なものを入れると、下記のような流れとなります。

- ①インストラクション
- ②リハーサル（ロールプレーで繰り返す）
- ③シェアリング
- ④もう一度リハーサル
- ⑤フィードバック（教師）
- ⑥シェアリング
- ⑦自己評価と感想

シェアリングにおいて、友達同士の評価を入れます。「どんな場面で誰がどうだった？」それが、フィードバックとなり、スキル獲得の支援となります。中学生には、教師の評価以上に良い影響と効果を上げることとなります。

7 授業とエンカウターの融合

教科指導の中で育てたい能力に、「関心・意欲・態度」に関連する力ともいえますが、「自分で自分を動機づける力」があります。また、「行動の模倣や試行錯誤する力」も必要な能力だといえます。これは、エンカウターのグループ体験を通して、効率的に身につけさせることのできる力でもあります。

人間関係を育て、グループを育てる指導は、かなりの部分で授業とオーバーラップしています。つまり、小集団での協力を体験するエクササイズや共同作業を体験するエクササイズは、表現力の育成や感情表出の訓練ともなっていて、授業を活性化することにつながります。

例えば、授業中に自分だけでは解らずに悩む場面があったとします。その時には、まわりの邪魔にならないように、まわりのノートをのぞき込んだり、タイミングをみて「ここ、どうなるの？」と聞くことが必要となります。そのような、「モデリング学習」や「リレーション」ができる力も、自然とエンカウターで培うことができます。

また、教育の基盤は人間関係にあるといえます。例えば教師側の意識として、伝えたいことが生徒に理解されているという手応えをもてるような話し方をしているのか。生徒の伝えたいことが、きっちり伝わっている実感をもてるような聴き方をしているのか。このことは、授業の質を左右することにつながります。

教師の話を生徒が聞いていない、教師の一方通行の授業は深刻です。この原因は、教師と生徒の関係性にかかわることが多いのです。教師の発問に生徒が意欲的に反応し、教師という窓口を介さずに、生徒間で活発に意見が続くような授業を目指したいものです。そのためには、授業にうまくエンカウターの要素を取り入れることが有効です。

例えば、授業に「あだ名」をつけて、「良い授業」とはこんな授業なんだと、生徒に理解させることも必要です。

「流れ星授業」は教師の一方通行の授業で、生徒は話を聞いていないという「良くない授業」です。

「扇形授業」は教師の発問がAに受け入れられ、次はB・・・C・・・というように、教師を窓口として授業が展開するものです。これも、あまり良い授業とはいえません。

「デルタ型授業」「星形授業」「ダイヤモンド型授業」のように、教師という窓口を介さずに、生徒間で活発に意見が続くような授業が「良い授業」です。3人意見が続けば「デルタ型」、5人続けば「星形」、それ以上なら「ダイヤモンド型」と、意見が続く過程で「これはすごい、新記録！」と生徒に実感させることも、効果的だといえます。

8 エンカウンター授業での悩み

授業での悩みやジレンマ、自分の苦手な部分を、とりあえず形だけ整える方向ではなく、きっちりと向き合い、自覚することが、悩みを解決する第一歩となります。うまくいっていないと教師が感じている場合、具体的には次のような自分を自覚することになります。イライラしている自分。攻撃的な自分。生徒を責めている自分。内罰的になっている自分。動揺している自分。困難を感じている自分。

前に進むということは、そういう自分を生徒に率直に語ることです。語りながら反応を見て、さらに前に進むことが、自分の世界をつくっていくことになるのです。つまり、「うまくやろう」という意識を「生徒理解」にシフトチェンジすることです。そこから教師と生徒のエンカウンターがはじまります。

エンカウンターを行う中では、「のれない生徒」もでてきます。生徒によって、反応も様々です。例えば、しゃべりすぎたり、恥ずかしさを強く訴えるなど、「敏感すぎる反応」をする生徒。「わからん」を連発したり、「何でこんなことをするの？」というような「攻撃的な反応」をする生徒。「ワークシートに見るおざなりな反応」をする生徒は、書く量が少なかったり、なぐり書きであったり、アイメッセージのない、とおりにっぺんのことしか書きません。また、横道にそれたり、理屈っぽい展開をする「向き合わない反応」。無言だったり、机に伏していたり、あからさまに反発するような「確かな抵抗」をする生徒もいます。

それぞれに対して、教師はプロフェッショナルな対応を行う必要があります。

例えば、「敏感すぎる反応」や「攻撃的な反応」をする場合には、レディネス不足やインストラクション不足という原因が考えられます。デモンストレーションを上手に行うことで、生徒の感情を変えることが大切です。教師は、わかりやすい自分の言葉で、長くないように教示することを心がけましょう。会話風になっていると、さらに有効です。

「ワークシートに見るおざなりな反応」の原因として考えられるのは、生徒のモチベーションの低さです。リーダーが自分を語るエピソードをうまく入れるなど、インストラクションの工夫が必要です。

「向き合わない反応」「確かな抵抗」に対しては、そこで起きている事実のみを指摘し、短くズバツと注意することが効果的です。また、カウンセラーの5つの技法である、受容・質問・繰り返し・指示・明確化を上手に取り入れることも有効です。シェアリングでー

言でも話をさせることで、気持ちが楽になることもあります。生徒自身も「のれていない」という自覚があり、そんな自分とつきあうのはつらいと思っているものです。だからこそ、生徒自身にそんな自分を意識させることが大切です。生徒自身がそれを和らげようとしながら、リレーションをつくりはじめます。

いろいろな生徒がいます。即効性を求めるのではなく、じわじわと効いてくるのを、余裕をもって待つ姿勢が教師には必要です。教師自身が楽しめるような、心持ちを広くもつ対応が求められるのです。

9 生徒を「説得」「納得」させる「キーワード」

教師の言葉は、生徒に大きな影響を与えます。生徒は心の底から納得したときに、素直に行動にうつし、自分を成長させようとします。生徒の心に強く印象を残すような、心に響く話をどれだけできるかは、教師に求められる力だといえます。そのための「発想」「着眼点」をもち、「自分の言葉」をもつことのできる教師になりたいものです。

また、どのタイミングでどんな言葉かけをするか。生徒によい刺激を与えるタイミングや場面を見逃さない、教師の感性も大切です。

「人を変えることはできない。人は皆、自らを変えることしかできない。できることは、変わるための第一歩を促進することにすぎない。揺さぶることにすぎない。相手の「知性」と「感情」と「身体」の周辺に「風を送る」（風土づくり）ことにすぎない。生徒が徐々に獲得していく。生徒を都合よく変えてくれるプログラムはない。」

「風土会」では、刺激を言葉で与える「キーワード」を、たくさん紹介しています。

○「人は聞いたことは忘れる 見たことは覚える したことは理解する」

| | | |
|---------|-------------|--------|
| 人の学びの記憶 | 聞いたことは | 20%の学び |
| | 見たことは | 30%の学び |
| | 自分で口に出すか書く | 70%の学び |
| | 自分で教える・行動する | 90%の学び |

○道徳の定義「人のためにもなり、自分のためにもなる」

○頭のよい人の定義「関連づけることのできる人が頭のよい人」

○メラビアンの法則 55%（視覚情報：見た目・表情・しぐさ・視線）
38%（聴覚情報：声の質・速さ・大きさ・口調）
7%（言語情報：言葉そのものの意味）

最初に視覚情報で判断されてしまう。

○シュロスバーグの表情相関図

表情などのノンバーバルな部分は、相手にとって影響がある。隣同士の表情は混同され

やすい。場にあった表情をはっきりとつくることを意識させる。

○共感の顔

プラスの感情・・・笑顔

マイナスの感情・・・悲しい顔

○ノンバーバル（非言語的）コミュニケーション

体の向き・視線・うなずく・微笑みかける・共感の「フンフン」という音・相手と同じ姿勢をとる

○いじめの実態

少ない順に・・・「満足型クラス」「管理型クラス」「なれあい型クラス」

「満足型クラス」は学習規律に加えたプラスアルファのあるクラス

例えば、自分達で何かを成し遂げた・自分達で高まっているという自覚など

○多様性トライアングル

「ビジョン」を作り出すのは「理論」、エンパワーするのは「実践」

「理論」に具体性を与えるのが「ビジョン」、支えるのが「実践」

「実践」を修正するのが「理論」、新しい展開をさせるのが「ビジョン」

○誰もがリーダーになれる。誰もが補い合えばいい。自分のよさができればいい。支えがあればいい。

アグレッシブ・リーダー：積極的な人（勢いはいいが、地道にコツコツは苦手）

ゲームメーカー・リーダー：賢い発言（つややかなことは言うけど、自分はよごれない）

ムードメーカー・リーダー：癒し系（目立たないけど、場をなごませる）

○パワーのあるやさしさ

○教師としてのスタンス

・自分を上に見ない→生徒を尊敬する

・人を見る目が無い→誰に対しても公平・平等な態度

・自分らしくやる →自分のカラーでやる。自分らしくないことを無理してやらない。

自分にプレッシャーを与えない。

発想を変えると楽→自由→ステキな世界

○ブレインストーミング（創造的集団思考）

自由に考えを出し合う・アイデアを出すこと重視・否定しない

○KJ法（グルーピングでカテゴライズ）

○「人の話を聴くことで人生の80%成功する」

「聴く」のイントロ

ポジティブリスニング

- ①ハーリスの3ない
- ②ボディリスの3く
- ③リターンリスニング
- ④クエスチョンリスニング

コミュニケーションの基本は「聴く」ことである。

「聴く」ときには必ず「ポジティブリスニング」をすることを約束する。

場面によって①～④を使い分けるように、しつけておく。

①ハーリスの3ない

「ハーリス」とは「ハートリスニング」の略。つまり、「心」で聴くということ。

「心」で聴くときには・・・人の話を じゃまし「ない」

人の話を さえぎら「ない」

人の話を 否定し「ない」 →これが、3「ない」

②ボディリスの3く

「ボディリス」とは「ボディーリスニング」の略。つまり、身体を向けて、身体をつかって聴くということ。話している人の方に「へそを向ける」

身体で聴くときは・・・うなず「く」

向 「く」

書 「く」 →これが、3「く」

生徒は、「ハーリス」と言えば、すぐに反応できるようになる。

「3ない」は何だったかと問いかけると、「じゃましない・さえぎらない・否定しない」と答えが返ってくるようになる。

授業中、ここは絶対に聴かせたいという時に、「暗号」を使うと効果大！である。

また、「うなずく」はソーシャルスキル・トレーニングでもある。まずは、トレーニング的にやらせることで、気持ちの交流ができてくる。気持ちはあとでもよい。

③リターンリスニング

人の話を「へえー、〇〇なんだ」と繰り返す・会話にはずみをつける。

④クエスチョンリスニング

質問して引き出す。

○親和動機

①頼りになる人を身近に求める欲求

②認めてくれる人を求める欲求

③比較対象する他者を求める欲求

④関わり合うことで、活気・やる気・楽しさが得られる他者を求める欲求

「親和動機」については、①②を求める欲求が小・中学生には強い。

③については、①②の欲求が十分でないと、ゆがんだ形であらわれると心理学的に言われている。自己評価ではなく、自己満足するために比較対象者を見るということである。

○ロジカルシンキング（論理的思考）

筋道をたてて考えること

3ステップ ①「なぜ」グセをつける ②紙に書く ③人に説明し、意見交換

有名なのは、トヨタの「なぜ、5回」

「なぜ、不良が起きたんだ？」 「設備が故障したから」

「なぜ、故障したんだ？」 「点検計画通りでなかったから」

「なぜ、計画通りに行われなかったんだ？」 「・・・だから」

普通、「なぜ」2回くらいのところを「なぜ」5回を必ず行う。すると、本当の原因が見えてくる。

このような「考え方」を覚えたら、自分で原因究明ができる。そこから道が開けていく。

10 エクササイズを実践するにあたって

10-① エクササイズの選択

現在まで、7回の「風土会」の中で紹介したエクササイズは下記の通り、32種類にもなります。この他にも、たくさん本が出版されているので、様々なエクササイズを知ることができます。

- ・ノートの取り方や助け合い学習の意義を実感させるエクササイズ
- ・言葉のキャッチボール
- ・えんぴつ対談（自己理解・他者理解・内観法）
- ・偏愛マップ
- ・背中合わせ・向かい合わせ
- ・グルーピング・トレーニング
- ・整列指導
- ・新聞紙でチャレンジ
- ・友達の輪集會
- ・タイタニック
- ・トラストフォール
- ・いいところさがし
- ・学級目標KJ法

- ・ 心の手紙
- ・ 宝さがし
- ・ あなたならどうする？
- ・ SOS 砂漠でサバイバル
- ・ すごろくトーク
- ・ ブラインドデート
- ・ 私は誰でしょう
- ・ My name is . . .
- ・ 先生はどこだ
- ・ 教室はどこだ
- ・ バンガロー殺人事件
- ・ クラスの歩む道
- ・ 十人十色
- ・ 担任交流
- ・ ～をよくする人（例：体育会をよくする人・合唱コンをよくする人・卒業式を～）
- ・ アサーショントレーニング
- ・ さわやかにあいさつ
- ・ つながっているね
- ・ 冬山からの全員脱出大作戦

エクササイズのやり方は、本を読めばわかります。しかし、本の通りにやったからといって、成功するとは限りません。また、誰かがやってうまくいった方法を真似したからといって、それが自分も同じようにうまくいくとは限りません。

教師もそれぞれに持ち味があり、目の前の生徒も様々です。生徒の実態に合わせて、自分なりの理論とビジョンとポリシーをもって、エクササイズをアレンジすることが求められます。

まずは、生徒の実態を把握することです。そのうえで、今どんな力を身につけさせたいのか、どんな集団にしたいのかというビジョンのもと、エクササイズを選択します。

例えば、4月であれば「出会い」を意識して「仲良く、いい友達になろう」をすりこむようなエクササイズを選びます。不安や緊張をやわらげ、クラスの中での存在感、所属感をもたせます。

次に、「団結力」や「友達づくり」「認め合う」エクササイズを、効果的に取り入れていきます。個々の自我を主張し、様々な衝突が表面化する頃には、もう一步踏み込んだ、互いを思い合う関係づくりを促すエクササイズを取り入れます。また、規律が緩みがちになる時期には、まとまりを意識し、雰囲気を引き締め直すエクササイズが必要です。

このように、時期に合わせて、生徒の実態に合わせて、必要なエクササイズを選択する教師の感性を養いましょう。

10-② 効果的なインストラクション

エクササイズの効果을大きく左右するのに、「インストラクション」でのインパクトがあります。生徒が自らやってみないと、自然に引き込まれるような導入を工夫することで、その後の取り組み方や効果が変わってきます。教師側に「心の余裕」があり、伸び伸びとした楽しい雰囲気をつくれるかどうかです。実際に教師がやってみせたり、意図的に代表生徒にやらせてみるのも有効です。

意外と逆発想でのインストラクションも大きな効果を生みます。例えば、エクササイズをやる前に、「ひとりぼっちになりそうな人は？」「自分から動こうとしない人は？」を發表させておくと、まわりの生徒が気を遣った動きを見せます。それを教師が上手に評価することで、その場の雰囲気がグッとよくなります。「やりにくいよ、その態度」と本音で語ることで、新しい展開が生まれるのです。

教師が「本音トーク」や「生徒の心をつかむ話」ができるのは、「発想力」の豊かさと確かな「着眼点」からくるものです。教師の力量ともいえるでしょう。

実際に、実践ビデオで紹介された「毒を吐く絵」は、非常にインパクトが強く、生徒も納得のものでした。教師の意図することが、生徒に素直に伝わる内容です。

下記がその際の内容です。

「これが水槽の中だとする。1人が毒を吐いたとする。(暴言やマイナス発言など)

その中にいる人はどうなる？」

生徒の答え「毒が充満する」

「毒が充満したらどうなる？」

生徒の答え「息苦しくなる」

「息苦しくなったら、他の人はどうする？」

生徒の答え「毒を吐く」

「他の人も毒を吐いたらどうなる？」

生徒の答え「毒が濃くなる」

「毒が濃くなったらどうなる？」

生徒の答え「苦しくなる」

「だけど、その中に毒も吐けずにじーっとしている人がいたら、そういうおとなしい人がいたら、その人はどうなる？」

生徒の答え「・・・・・・」

「その人は死ぬ」

「つまり、最初に毒を吐くのが悪い。それがなければ、こうはならない。」

ものすごい説得力です！

このような、生徒の心に強い印象を残す、実感のある「たとえ話」をされると、授業の途中で雰囲気をこわすような発言はできなくなります。自分が雰囲気をこわす最初の人に

は、なれません。

きっかけをつくるのは「最初の人」です。それが引き金となって、はずみとなって、その後に加わってきた人達が、結局「けんか」になることは、よくある話です。特に力関係が働く場合、弱い者同士がケンカをすることになります。ケンカのきっかけとなった人は、おとがめなしです。この話は「いじめ」の話にもつながる内容です。

このような話は、生徒の心に強く働きかけ、訴えかけます。

このように、意図をもってインストラクションをどうするのか考えることは、非常に大切なことです。

10-③ 振り返り（シェアリング）の意義

エクササイズの後には、必ず「振り返り（シェアリング）」を入れましょう。そこで、はじめてエクササイズが、ただの「楽しかった」で終わらない「意義」が生まれます。

例えば、身近な人達やよく知っている人に対しても、さらに「新しい発見」があったり、「気づき」が生まれます。相手の見方に、良い変化があらわれます。そこがエンカウンターを行う醍醐味でもあります。

また、生徒がワークシートを書き込んでいるときに、教師が独り言のようにぶつぶつしゃべるのも、効果があります。生徒は聞いていないようで、しっかり話を聞いているのです。そこで、教師の意図や思いをくみ取ることになります。新たな「気づき」にもつながっていきます。

10-④ 同じエクササイズをやることに意味はあるか

同じエクササイズでも、少しやり方を変えるだけで、新しい刺激となり、新鮮な気持ちで取り組むことができます。少しずつ難易度を上げていったり、条件を変えていけばよいのです。また、時期を変えることで、同じエクササイズでも、深まり方が変わってきます。

同じエクササイズをやることの良い面は、生徒が安心して取り組めることです。教師も余裕をもって生徒の反応をみることが出来ます。また、アレンジしたり深めたりと、教師側のアイデアも湧きやすくなります。生徒への要求度もコントロール出来ます。

躊躇せずに、どんどんエクササイズを試してみましょう。

11 終わりに

現在まで7回行ってきた「風土会」を一度振り返ってみることは、現在地を確認し、目的地をみつめるうえで、意義深いことです。目の前のことばかりに気をとられていると「虫の目」になるといわれます。虫は木しか見えませんが、鳥には森が見えています。

「鳥の目」を使って、空から「風土会」の姿を確認してみたのが、今回の「会報」です。

なによりもまさるものは経験です。実際にやってみないとわからないことが多いのですが、「自分のスタイル」を確立するための刺激になるヒントが、ひとつでもみつかることを願っています。

